

演 題 名 笑顔を取り戻すまで

施 設 名 介護老人保健施設 しおん

発 表 者 ○発表者(介護福祉士・奥田 秀和)

概 要

【はじめに】

認知症とうつ病によりBPSDが悪化したご利用者が入所後、穏やかに過ごせるようになり、笑顔を取り戻せたケースを報告する。

【症例紹介】

利用者 90代 女性 要介護4
(現病) アルツハイマー型認知症、うつ病、褥瘡、下肢拘縮
(既往) 左大腿骨転子部骨折

【治療(ケア)計画】

家族の意向：穏やかに過ごしてもらいたい
ニーズ：BPSD症状が改善し穏やかに過ごせる
目 標：介護を受ける際の不安を少なくする
穏やかに過ごせるようになる
職員全員：BPSDの軽減、メンタルケア

【経過】

排泄ケアやバイタル測定、リハビリや褥瘡の処置などに対し拒否・抵抗、その他BPSD症状が顕著にみられていたが、その症状の要因として羞恥心から抵抗、介護を受ける際の不安、環境の変化による混乱、職員の接し方の問題と捉え、接し方、ケア内容について以下の内容で統一を図った。

- ①介助を行う前にご利用者が不安にならないよう、挨拶や会話などのコミュニケーションを図る。
- ②ご利用者は結婚以前の苗字だと思っているので職員は名前で呼ぶ。
- ③ご利用者が嫌がる時は時間を空けてからの声掛け、もしくは職員2名で対応を行う。

【結果】

表情が和らいでいき、問いかけに返事をしてくれることもあった。そして嫌がっていた血圧測定にも応じるようになり、オムツ交換時に協力動作も見られたが、阿部式BSPD評価において昼夜逆転、幻覚・妄想の項目が悪化していった。

そうしたままケアを続けていったある日、本人から「あの車いす私のだから返しなさい」と訴えがあり「起きて過ごしたい」というニーズに気づく事ができた。

ご利用者の心身の状態など他職種との話合い「起きて過ごせるようになる」ことを目標に離床に向けてリハビリやおやつ時など、促しを行う事で離床の機会が増えていった。その後も施設の庭へ散歩をしたり、レクリエーションや行事などで他のご利用者から声を掛けられ笑顔で頷いたりと交流、活動が広がっていき。ベッドから起きてホールで食事の際には、食事を払いのけることはなくなり、ご家族から「車いすに起きれたんですか？」と驚きと喜びの声を頂いた。離床してからのBSPD評価において、悪化した項目は入所時のレベルに戻り、“怒りっぽく暴言を吐く”項目については、改善となった。

【考察】

ご利用者に対して必要な情報を共有しながら、実践できたことで、ご利用者との信頼関係の構築が進み介護拒否が減少していった。そして、ご利用者の心身の状態が回復していく中で“起きて過ごしたい”という想いに気づき離床に向けて取り組んだ結果、ご利用者の活動範囲が広がったことで心理状態も安定していき、BPSD症状の改善につながって以前のように笑顔を見せてくれるようになったと考えられます。